OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	三島由紀夫『潮騒』における「純愛」 : 同時代の性教育との関連性を視座として
Author(s)	朴, 秀浄
Citation	阪大近代文学研究. 2019, 17, p. 135-150
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71763
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

三島由紀夫『潮騒』における「純愛」
――同時代の性教育との関連性を視座として――

朴　秀浄

はじめに

一九五二年のギリシャ旅行をきっかけに、「健康への意志」(1)を表明した三島由紀夫は、『禁色』の連載終了後、「健康な小説」(2)として『潮騒』を書き下ろした。一九五四年六月に新潮社から刊行されたこの小説は、歌島という架空の離島に住む、漁夫の少年・久保新治と、海女の少女・宮田初江との純粋な恋愛が、恋敵と家の反対とを乗り越え、めでたく成就する経緯を描いた、いわゆる「純愛小説」である。『潮騒』は、刊行後まもなくベストセラーとなり、第一回新潮文学賞を受賞する他、これまで五回も映画化されるほど人気を博した。

原作の小説のみならず、映画『潮騒』ですら「健康な演出」(3)をアピールポイントにした『潮騒』をめぐって、武田泰淳は、「いかにも健康そうな明るそうな人物と風景を描いた「潮騒」の執筆者としての三島の心理状態の方が、はるかに不健康」であり、「でっちあげた健康」(4)という評価を行い、「健康」を極めようとした三島の「不健康」さを批評した。後年、三島は武田の評価に対して、「私の「潮騒」という小説を武田泰淳が非常に不健康だと言ってくれた。これはいい批評だと思います」(5)と言い、「健康」を求めたつもりの自作が、「不健康」と言われたことを不愉快に感じるような様子は見せなかった。

武内佳代はこのような『潮騒』の創作背景について、「逆説的に、その〈健康〉に潜む〈不健康〉を露呈させようと企てたのだ。同性愛を前面に押し出した『仮面の告白』や『禁色』が異性愛主義との真っ向からの対決だとすれば、『潮騒』はパロディ戦略を取っていわば裏側から対決を試みた作品に他ならない」(6)と指摘している。武内の論考は、『潮騒』を異性愛主義の影響下にある作品として読み取る本稿において大きな参考となった。

異性愛主義とは、男性と女性による異性愛だけを「正しい

セクシュアリティ」として強制する考え方である。竹村和子の知見を借りると、近代社会が規範とする「正しいセクシュアリティ」は、「終身的な単婚を前提として、社会でヘゲモニーを得ている階級を再生産する家庭内のセクシュアリティ」(7)のことを意味する。『潮騒』における新治と初江の恋愛や結婚に至るまでの過程は、このような異性愛主義に即しているものであり、作品が書かれた当時に流布していた異性愛主義の実践、すなわち性教育と連動している。

本稿は、「健康」な異性愛を描いた『潮騒』が、様々な面において一九五〇年代の性教育の教えに符合していたことを、性教育関連の書物を参照しながら検討する。さらに、『潮騒』が同時代の国語教科書に取り上げられたことに目を向けることで、このような『潮騒』の読まれ方が、作者の創作意図とどのように関連しているか解明したい。

一、「自然」な異性愛

『潮騒』は、刊行後まもなくベストセラーになったため、複数の映画会社が映画化をめぐって競争し、最終的には東宝が配給を担当することが決まった。当時の状況を伝える『朝日新聞』の記事には、「大自然の中に展開される「純潔で健康な」十代の恋をテーマとするだけに各社が目をつけた」(「潮騒」映画化　ひっぱりだこ」『朝日新聞』一九五四年七月六日付)と書かれており、『潮騒』の舞台である「大自然」と、主人公男女による「純潔で健康な」恋愛とが一緒に語られていることが見て取れる。映画公開を目前に広告が出された『読売新聞』(一九五四年一〇月一六日付)でも、「太陽に絶叫する愛の言葉　若者は逞しき胸を拡げ処女をいだく！怒濤の如く強烈でさゞ波の如く清純な大自然の恋！」というフレーズが見られ、映画制作側も「大自然の恋」を強調していたことが分かる。

実際、「自然」と「恋愛」との結びつきは、小説『潮騒』において重要な意味を持つ。新治がはじめて初江を目撃して以来、二人は観的哨と浜辺で偶然出会い、互いの思いを確認していく。初江に一目惚れした新治は、夜、寝られず「これが病気といふものではないかと」心配する。

> その晩、寝つきのよい新治が、床に入つてからいつまでも目がさえてゐるといふ妙な事態が起つた。一度も病気をしたことのない若者は、これが病気といふものではないかと怖れた。
> ……そのふしぎな不安は、今朝もまだつづいてゐる。しかし新治の立つ舳先の前には、広大な海がひろがつてをり、その海を見ると、日々の親しい労働の活力が身内にあふれて来て、心が安まるのを覚えずにはゐられない。
> (決定版全集四巻)

恋の感情を経験したことのない、新治の不安を描いたこの場面に関して、柴田勝二は「異性愛の感情は〈自然〉に逆行する要素として位置づけられる」[8]と論じている。しかし、ここで新治が不安を感じるのは、恋の感情が新治にとって未知なるものであるためであり、「海」という身近な「自然」が、むしろその恋の不安ですら抱擁していると解釈した方が妥当であるように考えられる。

というのも、新治と初江は「自然」の加護を受けながら、「自然と」恋に落ちるからである。

> まつすぐ我家へかへるつもりだつた若者の足は、自然と暮方の浜へ向つた。
>
> 浜では最後の一隻が引き上げられてゐるところであつた。ウキンチを巻く男、その綱を手つだてつ引く男の数は少なく、二人の女が算盤を舟の下にあてがつては押しあげてゐる。(…)そのとき舟を押しあげてゐる女の一人が顔をあげてこちらを見た。初江である。新治は今朝から自分の心を真暗にしたこの少女の顔を見たくなかつた。しかし彼の足は近づいた。汗ばんでゐる額と、紅潮した頬と、舟の引き上げられて行く方向を凝視して黒く煌めいてゐる瞳との、その顔は薄暗のなかに燃えてゐた。新治はその顔から眼を外らすことができなかつた。

元々家に帰るつもりだった新治は、「自然と」浜へ向かい、偶然にも初江に会う。その日の朝「川本の安夫が初江の入婿になる」という噂を聞いた新治は、心が真っ暗になり、初江の顔を見たくないと思っていたのだが、何故か初江に近づく。そしてこの日、二人の唇がはじめて触れ合う。浜辺での偶然の出会いと接吻は、その次の日の観的哨での再会の場面では、「きのふの夕闇の浜のできごとは、まるで彼らの意志から発したことではなくて、他動的な力がさせた思ひがけない遇発車といふ風に思はれた。あんなことがどうしてできたかふしぎである」と語られる。つまり、新治と初江の恋は、人間の意志に先立つ、「自然」の「他動的な力」によって成り立つものであり、作中に言及される「自然」には、風景以上の意味が含まれていると言える。

ここで注意を払いたいのは、新治が、恋の感情を「病気」ではないかと心配するほど、恋愛に無知だという点である。作中で「都会の少年はまづ小説や映画から恋愛の作法を学ぶが、歌島にはおよそ模倣の対象がなかつた」と語られるように、新治は「恋愛の作法」を知らない少年である。それにも関わらず、初江に接吻し、初江の裸を抱いて軽く触れる。言い換えれば、新治によって表象される異性愛は、「模倣の対象」がなくとも「自然と」恋の手順に移ることのできる、「自然」な本能であると理解できる。

ところが、このような新治の異性愛表象は、『仮面の告白』の主人公「私」と対をなしていることが先行研究によって指摘されている。有元伸子は、「無知で本を読まない人物として設定された新治は、まったく未知の状態から恋へ入っていく」一方、「《浪漫的な物語の耽読から、まるで世間しらずの少女のやうに、男女の恋や結婚といふものにあらゆる都雅な夢を託してゐた》「仮面の告白」の〈私〉は、(…)あらかじめ知識として恋愛を知りすぎたが、その後、精神的な愛のある異性への性欲を感じられず苦しむ」[9]と述べている。有元はこの問題については詳細に述べていないが、『潮騒』に見られるセクシュアリティの不均衡を考えるための、有効な端緒を示しているように考えられる。

男性同性愛を描いた『仮面の告白』と『禁色』において、主人公「私」と悠一の性的指向は「生まれつき」であると決定づけられている[10]。すると、新治が「自然と」初江に出会い、「自然と」性愛に目覚めていく異性愛の成り行き同様、「私」と悠一が、同性に惹かれるのも「自然」なはずである。しかし、異性愛だけを「正しいセクシュアリティ」と見なす社会の前に、「私」と悠一の同性愛指向は「自然」なものではなくなり、本当の「病気」として扱われる。したがって、「私」は「男女の恋や結婚といふものにあらゆる都雅な夢を託し」(決定版全集一巻)、悠一は男女間の欲情を「懸命に模写」(決定版全集三巻)することで、「自然」で「正常」な異性愛を演じようとしたのである。異性愛者の新治は、同性愛者の「私」や悠一と二項対立する人物として巧みに設定されている。

二、青年男女の「純愛」と「純潔」思想

新治と初江の「純愛」は、「純潔」という道徳と結び付けられている特徴がある。藤井淑禎が「純潔と、それと向かい合うことで研ぎ澄まされていった「純愛」という思想こそは、(…)昭和三十年代精神のかたち」[11]であると指摘しているように、『潮騒』が刊行された時代は、石坂洋次郎『青い山脈』(一九四七年、新潮社)、大島みち子・河野実『愛と死をみつめて――ある純愛の記録』(一九六三年、大和書房)に見られるような「純潔」の観念が、一つの規範として存在し、男女の「純愛」を支えていた。『潮騒』の「純愛」もこの系譜にある。

嵐の日、初江と待ち合わせを約束した新治は、先に観的哨に到着し、焚火に暖められて居眠ってしまう。目が覚めると、肌着を脱いで、濡れた身体を乾かしている初江が見え、新治は、焚火を乗り込んで初江と抱き合う。

さうして初江が言つたのは、道徳的な言葉である。

「いらん、いらん。……嫁入り前の娘がそんなことしたらいかんのや」

ひるんだ若者は力なく言つた。
「どうしてもいかんのか」
「いかん」―少女は目をつぶつてゐたので、訓誡するやうな、なだめるやうな調子がすらすらと出た。「今はいかん。私、あんたの嫁さんになることに決めたもの。嫁さんになるまで、どうしてもいかんなア」
新治の心には、道徳的な事柄にたいするやみくもな敬虔さがあつた。

ここで初江が発している「道徳的な言葉」は、「嫁入り前の女性は処女であるべきだ」という言葉に置き換えられる。初江の「道徳的な言葉」を聞いた「新治の心には、道徳的な事柄にたいするやみくもな敬虔さがあつた」と書かれているように、新治は簡単に断念し、奇妙なほど葛藤は起こらない。これは、新治も婚前純潔思想を内面化しているためであろう。

九内悠美子の先行研究によると、戦後の日本において「国民に〈道徳〉的秩序を示し、〈国体保護〉を支える家族制度を確立するための一つの方策」として「純潔教育」が導入された。九内は、『潮騒』が「執筆時から発表時にかけて政府が盛んに行っていた〈純潔〉政策に添っている」と指摘している(12)。このような九内の論考を受けた武内佳代も、作中に言及される「衛生」を純潔教育に関連付けている。武内によると、衛生とは衛生教育のことを指しており、戦後は衛生管理のために健康や性に関する教育が学校機関や各地の青年団を通じて普及した(13)。作中、新治の参加している「青年会」では、衛生についての議論が行われるため、『潮騒』の「衛生」は純潔教育のことであり、その知識を『潮騒』の若者世代、つまり戦後世代が内面化していると、武内は読み取っているのである。しかしながら厳密に言えば、『潮騒』の純潔思想は、「戦後世代」だけを対象に行われた、「戦後」のものとは限らない。

戦後の純潔教育は、戦前戦中において西洋性科学を積極的に受け入れた日本人学者が後押しした異性愛主義の思想を引き継いだものである。戦後、日本の性教育施策は、純潔教育として出発し、一九四六年一一月の各省次官会議では、GHQの公娼廃止要求に応じて(14)、「私娼の取締り並びに発生の防止および保護対策」(略「対策」)が決定された。これを受けた文部省社会教育局長による「純潔教育の実施について」(略「実施」)が、四七年一月に全国の都道府県に通達された。そして四九年二月には、文部省純潔教育委員会による「純潔教育基本要綱」(略「要綱」)、五五年三月には、文部省社会教育審議会による「純潔教育の普及徹底に関する建議」(略「建議」)が「純潔教育の進め方」を付して出され、純潔教育の枠組みが完成した(15)。

「対策」には「男女間の交際の指導・性道徳の昂揚を図る」と記され、新しい教育の必要性が台頭している。それが

「実施」において「純潔教育」という名で示され、「要綱」では純潔教育の目標、方針、方法などが書かれている。とりわけ注目したいのは、「建議」に説明されている「「純潔教育」をとりあげたいきさつ」である。ここには、「「性教育」という言葉の印象からは、極くせまい意味に受け取られるおそれがある」と述べられ、性教育という言葉から距離を置こうとする意図が見受けられる。『潮騒』と同時代の純潔教育関連書籍である『純潔指導』（鈴木清・間宮武、日本文化科学社、一九五四年）の「はしがき」には、「「こどもの性教育」は、純潔指導であるべきだ」「性教育というと、とかく性の技巧や性の処理、性病の問題などに重い比重がおかれるが、こどもにとってはそれらはそれほど重要ではない」「性に関する単なる知識というよりも、それをいかにこどもの生活にいかし、性に関するモラルを高めるか」が重要であると明記されている。これは、戦後の純潔教育が、性欲教育の側面を有している戦前の性教育とは一線を画した、「よりよき人間を形成する」（「建議」純潔教育の意義理念）ことを目標とする道徳教育の一環であることを示唆する。一九一〇年代から二〇年代にかけて流行した性欲学に触発され、とりわけ羽太鋭治、澤田順次郎のような通俗性欲学者によって先導された性欲教育は、性に関する知識の普及を目的とし、性欲が人間の本能であることを認めながらも、それが社会の秩序を乱さない方向への善導を目指した[16]。

しかし、純潔教育の内容を確認してみると、性教育の体制を少なからず受け継いでいることが窺える。たとえば、文部省社会教育審議会の純潔教育分科審議会が、純潔教育指導のために発行した『男女の交際と礼儀』（一九五〇年）には、「恋愛とは一男一女が性的行為に関して、理想化された性欲の実現を求める合意から生じる和合である」「そしてこの和合は結婚の本体であって、これを法律上から登記したものが婚姻である」（五三頁）と書かれており、恋愛は結婚の前提になっている。さらにこの本では、「恋愛から、婚約時代を通じて、特に要望したいことは、結婚までは、お互いに純潔を守るというはっきりした心構え」（三九九頁）であると述べられている。それと同時に、「結婚前の男女が「よい家庭をつくる」ことを深く考え合い、よい父母と健康な素質のよいこどもがあって、はじめて可能である」から、「自分たちのよい素質を残し伝え、次の幸福な時代を築く」ために「婚約にあたっては、健康証明書を交す」（四〇〇頁）ことを奨励している。つまり、健康な身体を維持し、優良な子孫を次世代へ遺すために、婚前純潔が強調されたのである。

これと酷似している内容が、戦前に出版された赤津誠内『性典』（一九二七年、誠文堂）にも見られる[17]。赤津は、恋愛は「結婚への道を辿る、両性の理解の道伴れ」であると示し、これは、「相愛する両性が純潔を保つてよくその結婚生活に入るまでの、よき準備」（一九五頁）であると記してい

る。また、結婚を理想的に成立させる条件として「健康診断書」に言及し、「多くの処女の結婚には、その夫であるべき男性の身許、素行、財産、収入家系などは、非常に顕密に調査されるが、その結婚生活の幸福であるべき、健康に就いては、甚だ無関心であるやうなのは、歎ずべきことである」から、「子孫にその害毒を遺伝する」（一八九頁）性病の有無を明記した健康診断書を交換すべきだと言っている。ここから分かるように「純潔」は、戦後の純潔教育以前から、すでにその重要性が説かれてきた。『潮騒』では、戦前世代である新治の母・久保とみが、自身の健康な体を眺めながら『こいぢやまだ、子供の三人や五人は生めるな』と思った途端に、「貞淑な心は俄かにおそろしくなつて、身じまいをしてから良人の位牌を拝んだ」とあり、歌島の貞操観念が、戦後世代に施された教育によるものとは限らないことが確認できる。

ただし、戦前の純潔思想においては、男性より女性に純潔の重荷、すなわち「処女を守るべきだ」という責任を背負わせたことを見逃してはならない。川村邦光によれば、処女とは、性行為の有無に関わらず、「家に処る未婚の娘」または「夫のいない単身の女性」を指す言葉であったが、一九世紀末から性交の有無によって処女か否かが決定されるようになった[18]。加藤秀一もまた、「元来「処女」とは未婚の女性全般を指す語だったが、明治期に入ると性体験のない未婚の女性だけを意味するようになり、大正期にはそれが定着したと考えられる。そうした意味の変容をもたらした主な要因は純潔を尊ぶ良妻賢母思想だった」[19]と指摘している。優良なる子孫の繁殖を保証するために、その子孫を産む女性は結婚するまで「純潔な処女」であるべきだ、という優生学に基づいた言説が戦前、国家を支える道徳規範として存在し、性教育にも反映され、「純潔」は女性の義務として語られることが多くあった。澤田順次郎『嫁入り前の処女のために』（一九二〇年、天下堂）のような、若い女性を対象とする啓蒙的な著作が書かれたことがその傍証であろう。

一方で、戦後の純潔教育では、「要綱」に「貞操は相手のためにのみ守るのでなく、みずからの人格として必要であり、男女相互の倫理である」と記されているように、「純潔」は、男女両性の人格として取り上げられ、女性にのみ課せられる義務ではなく、「男女相互の倫理」となっていることが確認できる。「今はいかん」という初江の言葉を聞いた新治が、己の気持ちを押し付けず断念したことには、このように、「純潔」を自身の倫理として受け止める、人格の問題が関わっている。初江と一緒に「純潔」を守る新治の人格は、初江を襲う川本安夫との対比によって克明に表れる。

「とぼけるな。新治と乳繰り合うたくせに。俺を出し抜きやがつて」

「あほ云ひな。何もせやせん」
「俺、みんな知つとるぞ。(…)な、俺とも同じことせよや。大事ない。大事ない」
「いらん！いらん！」
初江は身をもがいて逃げようとする。安夫は逃すまいとする。もし事の前に逃したら、初江は父にいひつけるであらう。しかし事の後だつたら、誰にも言わないだらう。安夫は都会の三文雑誌によく出てくる、「征服された」女の告白といふやつが好きで仕方がない。

作中、貧しい家に母と弟と暮らす新治と対照的に、安夫は村の名門の生まれとして、青年会の支部長に就いており、初江の父である照吉に気に入られ、入婿になる予定であった。ただし、性的な接触を断る初江に対して、二人が取る態度の差から分かるように、新治は相手を尊重して断念する人格者であり、安夫は相手に強制する非人格者である。実際、安夫は歌島を離れては売春を楽しみつつも、歌島に戻ってくると「固く口をつぐみ」「偽善者を気取」る人物である。そこで、照吉は二人を試すために舟に乗らせて修業させるが、その結果、新治の優れた人格が証明され、照吉は「男は気力や。気力があればええのや。この歌島の男はそれでなかいかん。家柄や財産は二の次や。(…)新治は気力を持つとるのや」と、新治と初江の結婚を認める。

「純潔教育シリーズ」の一巻として一九四九年に出版された『純潔教育はなぜ必要か』には、「わが国の従来の結婚が、外部的な責任は果たしながら、おうおうにして破綻に終わる」理由は、「配偶者を選ぶのに常識的にすぎ、人格と人格の結びつきよりも、家の格、財産、明利、つりあい、形の上の美醜などを第一義に」[20]しているからだと説明されており、戦後の純潔教育では、男女の結婚において人格が重要視されるようになったことが窺える。健康な身体と精神の持ち主である新治が、安夫を追い抜いて初江と結ばれる『潮騒』のストーリーラインは、こういった純潔教育が理想とする恋愛観・結婚観に叶うものであったと言える。

戦前の性教育と戦後の純潔教育は、どちらも男性と女性による恋愛が結婚につながることを究極の目標としていたことに共通点があると指摘できる。すでに引用した『性典』や『男女の交際と礼儀』に見られるように、恋愛と結婚の当事者は、男性と女性、すなわち「一夫一婦」に限定されている。言い換えれば、戦前から戦後にかけて、一貫して婚姻内性交だけが望ましいものとされていたのである。『潮騒』とほぼ同時期に刊行された『純潔指導』(一九五四年)には、男女交際の意義について、「異性との交際は人間にとって必要でありまた自然である」「安易な考えによって異性を求め、恋愛遊戯や性の遊びにふけったり、同性との性的倒錯行動におちいるということが、いかに誤りであるかは論をまたないであ

ろう」[21]と書かれている。別の言葉で言うと、『潮騒』が書かれた時代は、「異性との交際」が「必要」「自然」であり、その「異性との交際」に当たらない売春、手淫、同性愛などは「不必要」「不自然」とされていたのである。このような時代に、「自然」の加護を受けながら「自然と」恋に落ちる青年男女を描いた小説が、純潔教育においていかに好都合な教材になり得たかは想像に難くない。

三、『潮騒』の国語教科書掲載

このように純潔思想を基調とする青年男女の恋愛が描かれている『潮騒』は、現に同時代の高等学校用国語教科書に収録された。筑摩書房『国語(二)』(一九五八年)、尚学図書『高等学校現代国語(一)』(一九六二年)、実教出版『現代国語(一)』(一九六二年)・『現代国語(一)改訂版』(一九六六年)・『現代国語(一)三訂版』(一九六九年)などの国語教科書が確認できる。『潮騒』は、三島が書いた小説の中で最も多くの教科書に取り上げられているし、彼の代表作とされる『仮面の告白』や『金閣寺』よりも早く教科書に紹介された[22]。それだけに同時代の反響が大きかった作品であろうが、この点に焦点を当てた先行研究は殆ど見当たらない。磯貝英夫の論考において「この作品の主人公は、初江の父親に代表される村の掟―外的秩序にまことに充実な規範青年で、(…)それは、教育委員会的倫理感をも一応満足させ、だからこそ、教科書にも採用されることになった」[23]と書かれているだけだ。

『潮騒』が同時代の国語教科書に掲載されたことには、様々な理由があると考えられる。筑摩書房・尚学図書・実教出版の三社が、『潮騒』の学習課題として共通的に挙げているのは、「描写のすぐれていると思うところ」・「自然描写のすぐれている所」・「描写の特徴」を考察してみることである。そのため『潮騒』は、まず、その「描写」が高く評価され、国語教科書に載せられたと推測できる。また、尚学図書『高等学校現代国語(一)』の編者に、三島の学習院中等科時代の国語教師である清水文雄の名前が見られ、『潮騒』の国語教科書掲載をめぐる、色んなファクターの存在を思い浮かばせる。そこで本稿の着目するところは、当時、国語を含めた一般教科目を通じて純潔教育が行われた点である。前章で取り上げた、文部省純潔教育委員会による「純潔教育基本要綱」(一九四九年)を見れば、純潔教育を行う場所として家庭・社会・学校が挙げられている。中でも学校においては「特に純潔教育のみを取上げることなく、時宜にふれ、あるいは一般教科内容を通じて、直接この教育を浸透するように留意」することが明記されている。また、『潮騒』刊行の一年後に出された、文部省社会教育審議会による「純潔教育の進め方」(一九五五年)にも、純潔教育の指導方法として「指導者は討論による指導の効果をあげるため、文芸・ニュースなどにあ

らわれた男女間の問題の事例を捉え、興味と感心をひきながら討論を発展させ」ると書かれている。つまり、当時の教科書に載せられた文学作品に見られる男女の恋愛・交際は、純潔教育の素材として機能したと言える。

『潮騒』が収められた筑摩書房『国語（二）』の指導要領書に該当する『国語　学習指導の研究（二）』には、『潮騒』の「解説」に次のようなことが述べられている。

全編の上で注目しなくてはならないのは「一つの道徳の中でかれらは自由であり……」という一語である。確かに、この小説は「一つの道徳の中で」明るい自由と、ゆるぎのない幸福とを戦い取っているとも言える。が、この「一つの道徳の中で」ということばが、作中のどういう生活を意味しているかということは、高校生年齢の青年には、ほんとうには、よくわからないであろうとも考えられる。指導者は、かれらの真実に耳を傾けることが肝要である。

ここでは、新治と初江の恋愛が「一つの道徳の中で」結ばれたことを強調しつつも、これが何を示唆するか高校生にはまだ十分に理解できないため、指導者の役割が重要だと説明している。これまで見てきたように「道徳」は、「婚前純潔」に置き換えられるが、重点を置きたいのは、それが学生に分かってもらえるように、指導書においてその指導方法が示されている点である。筑摩書房『国語（二）』には、原作の一章、三章、四章、一六章だけが採録され、間をあらすじでつないでいる。したがって、教科書の採録部分だけで『潮騒』の全体像を追うことはできない。また、「道徳」に直接関連している八章の観的哨の場面は採録されていないため、教科書ではじめて『潮騒』に接した学生は、指導要領書に即して教師が教えた『潮騒』の読みをそのまま受け止めた可能性が高いと考えられる。

ところで、原作のどこが収録され、どこが省略されたか確認すると、教科書の編集者や、その教科書を検定した文部科学省が、教科書版『潮騒』を以て導きたかった作品の読み方がより明確に見えてくる。筑摩書房・尚学図書・実教出版の三社が制作した教科書は、それぞれ採録している部分は違うものの、省略している部分は一致する。それは、初江の乳房を描写した場面である。道に迷っている初江に偶然出会った新治は、初江の赤いセーターの胸に、黒い一線が引かれているのを見て驚く。以下は原作からの引用である。

初江は気がついて、今まで丁度胸のところで凭れてゐたコンクリートの線が、黒く汚れてゐるのを見た。うつむいて、自分の胸を平手で叩いた。ほとんど固い支へを隠してゐたかのやうなセエタアの小高い盛上がりは、乱

暴に叩かれて微妙に揺れた。新治は感心してそれを眺めた。乳房は、打ちかかる彼女の平手に、却つてじやれてゐる小動物のやうに見えた。若者はその運動の弾力のある柔らかさに感動した。はたかれた黒い一線の汚れは落ちた。

初江の胸の動きとそれに感心して眺める新治を描写しているこの段落は、筑摩書房『国語(二)』と尚学図書『高等学校現代国語(一)』において、最初から存在しなかったように丸ごと削除されている。実教出版『現代国語(一)』『現代国語(一)改訂版』『現代国語(一)三訂版』には、「初江は気がついて、今までちょうど胸のところでもたれていたコンクリートの線が、黒くよごれているのを見た。うつむいて、自分の胸を平手でたたいた。はたかれた黒い一線のよごれは落ちた」とだけ書かれており、異性の身体に性的好奇心を抱く思春期青年である新治の一側面は排除されている。

新治が性的好奇心と欲望を抑え、初江と共に婚前純潔を守る内容を活かした方がむしろ教訓的かつ効果的ではないかと考えられなくもないが、教科書を作る側は、性的な事柄を一切省略することで、偶然出会った男女が、いつの間にか互いに惹かれ、困難を乗り越えて結ばれるという、「健全」な恋愛感情だけを取捨選択したのである。ここで再び筑摩書房『国語　学習指導の研究(二)』を見ると、「学習の目標」に「主題である恋愛も清純公明で、行動的で、生活的なものとして叙されている。(…)平凡な人間の平凡な生活の中から掘り起こされた生の歓喜は、学習者のすべてに強い共感と感銘を与えることだろう」と述べられている。教科書版『潮騒』において何よりも重要なのは、学生に「共感と感銘」を与えられる望ましい恋愛、青年男女の恋愛そのものであることが捉えられる。

四、『潮騒』の創作背景

面白いのは、青年の恋愛における性的な事柄に目をつぶった教科書同様、作者の三島由紀夫は『潮騒』を構想した際に、物語の舞台となる歌島を清浄な島として設定し、不浄なものを切り取ろうとした点である。歌島は、三重県鳥羽市の神島をモデルとしていおり、一九五三年三月に神島をはじめて訪問した三島は、その感想を川端康成宛の書簡に綴っている。

「禁色」の次の、ああいふデカダン小説とは正反対の健康な書下ろし小説を書く準備に、調査に来てゐるのです。人口千二、三百、戸数二百戸、映画館もパチンコ屋も、呑屋も、喫茶店も、すべて「よごれた」ものは何もありません。この僕まで忽ち浄化されて、毎朝六時半に起きてゐる始末です。ここには本当の人間の生活がありさうです(24)。

まず、『潮騒』が男性同性愛を題材とする『禁色』の連載が終わった直後に書かれた作品であることを念頭に置きたい。この書簡において三島は、『禁色』を「デカダン小説」、そして『潮騒』を「健康な書下ろし小説」と呼びつつ、『潮騒』の舞台となる神島に、「よごれた」ものがないことに感心している。実際、作中の歌島はこの書簡の神島同様に、「一軒のパチンコも、一軒の酒場も、一人の酌婦も」ない、「どんな時世になつても、あんまり悪い習慣は、この島まで来んうちに消えてしまう」清浄な島であると描写されている。また、「安夫はゆうべこつそり買つた女の話を、千代子にほのめかさうと思つたが、やめにした。ふつうの農魚村なら、安夫が女を知つてゐることは、自慢話の種になる筈だつたが、清浄な歌島では、彼は固く口をつぐみ、こんな若さで偽善者を気取つてゐた」と語られるように、都会から離れた田舎の農漁村のなかでも、歌島が特別清浄な島として形作られていることが分かる。

有元伸子は、こうした清浄な歌島像は、虚構性の強いものであると指摘しながら、その証拠として作中、むかし歌島に存在していたとされる「寝屋」という若い衆の合宿制度に言及している[25]。柴田勝二の調査によると、「寝屋」は離島に多く見られる習俗であり、若者同士の交流だけでなく、婚姻の交渉が行われるという性的な側面を持っている[26]。しかし『潮騒』では、「寝屋」を受け継いだ「青年会」は、「教育や衛生や、沈船引揚や海難救助や、また古来若者たちの行事とされている獅子舞や盆踊りについて議論が闘わされ」る場としてしか述べられておらず、性的な側面は綺麗に分離されている。言い換えれば三島は、モデルの神島以上に清浄な、とくに性的に清浄な空間を創り上げようとしたのである。

ここには明らかに意図があると思われる。三島は未使用の単行本用「あとがき」において次のようなことを書いている。

> 私は一篇の牧歌小説を書かうと企て、わがアルカディアを描かうと試みた。いふまでもなく現実の日本のその地は既成道徳が生き永らへてゐるところである。「禁色」二部作によつて、既成道徳との対決の困難を味はひつくした私は、今度は悪魔が仏陀に化けるやうに、私自身、私の敵手である既成道徳に化け変つて、小説を書かうと発心したのである。(…)私はとにかく既成道徳に化けたのであるから、既成道徳の善さと美しさとしか語らうとしなかつたのである[27]。

『禁色』は、主人公・南悠一が、同性愛を「病気」「変態性慾」と差別する「既成道徳」に抵抗しようとしたが、結局、既成道徳の世界、すなわち異性愛の社会に還元される結末となっている。のみならず、『禁色』をめぐる作品評価は、「こ

の小説に出てくる倒錯者は(…)何ともいえずグロテスクである」[28]という書評にも見られるように、芳しいものではなかった。作品内外両方において「既成道徳との対決の困難を味はひつくした」三島は、あえて「既成道徳の善さと美しさ」だけを描き、「既成道徳」に従う「健康」な世界を作り出した。その結果『潮騒』は、「ベストセラー」「新潮文学賞」「映画化」となり、『禁色』とは真逆の好評が得られた。三島はこのような『潮騒』の成功について、後年、「冷水を浴びせる結果」[29]であったと回想している。つまり『潮騒』は、「既成道徳」に従う「健康」な世界を追求することに、真の目的があった訳ではないと言える。

また、三島が新治について言及した文章に注目したい。

> 「潮騒」における思春期の設定は小説の道具にすぎず、私は人間の思春期なんか、別に重大に考へてゐない。あの小説で私の書きたかつたのは、小説の登場人物から「個性」といふものを全く取去つた架空の人間像であつて、そのためにわざわざ、遠い離れ小島へ話をもつてゆき、年齢もとりわけ少年期の人物を選んだわけである[30]。

思春期の少年少女の性の芽生えを描いたフランス映画『青い麦』(一九五四年)の映画評を依頼された三島は、後年、自作『潮騒』と比較しながらこのように言った。思春期青年にありがちな反抗的態度は見られなく、共同体のルールに順応する新治について、作者は「個性」のない「架空の人物像」であると指摘している。このような新治の人物像は、「平凡な人間の平凡な生活」を讃美し、そのような人生を送る人間を育成しようとした教科書の作り手にとって、便利な材料であったに違いない。

問題は、「あとがき」とこの批評における三島の口調から察せられるように、虚構性の強い舞台と個性のない人物を考案することで三島が暴きたかったのは、歌島のような過渡に清浄な島を設定して「よごれたもの」を排除し、新治のような「個性」のない人物を作り出さない以上、盲目的なまでに道徳に従う「純愛」は、もはや不可能だということである。「既成道徳に化け変つて」「既成道徳の善さと美しさ」を極めようとした作者の狙いは、「自然」な「異性愛」＝「既成道徳」の権化である若い男女の恋愛に伏在している人工的・人為的な側面を浮上させることにあったのではないかと推測できる。しかしながら、このような創作背景とは裏腹に、『潮騒』の「純愛」は、同時代の純潔教育理念の的を射る「道徳」として消費され、皮肉なことに教科書にも掲載される「模範」となったのである。

おわりに

『潮騒』は、前作の『仮面の告白』『禁色』とは異なる、異性愛の世界を描いた小説である。本稿は、『潮騒』が『禁色』の連載が終わった直後に書き下ろされた作品であることを念頭に置きながら、『潮騒』における青年男女の「純愛」が、「不自然」に感じられるほど「自然と」成立し、「自然」の中で結ばれることに着目した。このような「自然」な異性愛の表象は、戦前から戦後にかけての性教育・純潔教育の両方が一貫して規範としてきたものである。ただし、作中、新治と初江が〈共に〉従う婚前純潔思想や、婚姻において重視される〈配偶者の人格〉などは、戦後の純潔教育においてその重要性が説かれたものであることを、一九五〇年代の純潔教育の書物を参照しつつ検証した。作者の三島由紀夫は、あえて異性愛の規範に噛み合う「純潔」な「純愛」を作り出し、「自然」とされる青年男女の異性愛に潜んでいる違和感を浮かび上がらせようとしたが、このような創作意図とは逆に、『潮騒』の「純愛」は、同時代の純潔教育の理想を満たす恋愛像となり、国語教科書に掲載された。

【付記】本稿は阪大比較文学会シンポジウム(二〇一八年一一月一五日、於大阪大学)における口頭発表をもとに加筆修正したものである。発表の際に千葉大学の佐藤宗子先生、本学の橋本順光先生より貴重なご教示ご意見を賜った。記して心から感謝の意を表したい。

注

(1) 三島由紀夫「私の遍歴時代」『決定版三島由紀夫全集』三二巻、新潮社、三二〇頁(初出『東京新聞』一九六三年一月一〇日～五月二三日)。

本文中に引用している三島由紀夫のテクストは、すべて『決定版三島由紀夫全集』(全四二巻・補完一巻・別巻一巻、新潮社、二〇〇〇年～二〇〇六年)に拠る。

(2) 三島由紀夫「川端康成宛一九五三年一〇月一七日書簡」決定版全集三八巻、二七五頁。

(3) 無記名「健康な谷口演出」『朝日新聞』一九五四年一〇月一八日付。

(4) 武田泰淳「小説案内(上)青春のモラル」『毎日新聞』一九五四年六月二五日付。

(5) 三島由紀夫「デカダンス意識と生死観」決定版全集四〇巻、一八六頁(初出『批評』一九六八年六月)。

(6) 武内佳代「三島由紀夫『潮騒』と『恋の都』――〈純愛〉小説に映じる反ヘテロセクシズムと戦後日本」『ジェンダー研究』十二号、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター、二〇〇九年、六三頁。

（7）竹村和子『愛について――アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店、二〇〇二年、三七～三八頁。
（8）柴田勝二「二つの〈太陽〉――『潮騒』の寓話」『三島由紀夫　魅せられる精神』、おうふう、二〇〇一年、一四〇頁。
（9）有元伸子「三島由紀夫『潮騒』論」『広島大学大学院文学研究科論集』六六巻、広島大学大学院文学研究科、二〇〇六年、四二頁。
（10）『仮面の告白』の主人公「私」は、ドイツの性科学者マグヌス・ヒルシュフェルトの生物学的な同性愛言説を援用しつつ、自己の性的指向を「宿命」として受け止めている（久保田裕子「『仮面の告白』――セクシュアリティ言説とその逸脱――」（『三島由紀夫研究③』鼎書房、二〇〇六年）に詳しい）。また『禁色』の悠一に関しても、作中に「生まれてから、女性をほしいと思ったことがなかつた」と明記されている。
（11）藤井淑禎『純愛の精神誌――昭和三十年代の青春を読む――』新潮社、一九九四年、一七頁。
（12）九内悠水子「三島由紀夫「潮騒」論――歌島の〈道徳〉、芸術家の〈道徳〉」『広島女学院大学国語国文学誌』三六号、広島女学院大学日本文学会、二〇〇六年、一三頁。
（13）注（6）に同じ、六四頁。
（14）田代美江子「戦後改革期における「純潔教育」」『教育学研究室紀要――〈教育とジェンダー〉』三号、女子栄養大学、二〇〇〇年、三二～三四頁。
（15）本文中に引用している文部科学省が発令した純潔教育関連の施策は、すべて『社会教育における純潔教育の概況』（文部省社会教育局、一九六七年）に拠る。
（16）赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房、一九九九年、二八〇頁。
（17）赤津誠内『性典』（一九二七年、誠文堂）は、三島由紀夫の蔵書目録に含まれている。詳細は、島崎博・三島瑤子編『定本三島由紀夫書誌』（薔薇十字社、一九七二年）を参照されたい。
（19）川村邦光「〝処女〟の近代――封印された肉体」『セクシュアリティの社会学』岩波書店、一九九六年、一三二頁。
（19）加藤秀一『〈恋愛結婚〉は何をもたらしたか――性道徳と優性思想の百年間』ちくま新書、二〇〇四年、一一四～一一五頁。
（20）久布白落実『純潔教育はなぜ必要か』印刷庁、一九四九年、四七～四八頁。
（21）鈴木清・間宮武『純潔指導』日本文化科学社、一九五四年、二四六～二四七頁。
（22）『仮面の告白』（一九四九年）は角川書店『高等学校現代国語（三）』（一九六五年）、『金閣寺』（一九五六）は第一学習社『高等学校現代文』（一九八三年）が最初である。詳細は阿武泉『読んでおきたい名著案内　教科書掲載作品3000』（日外アソシエーツ六三三～六三四頁）を参照されたい。
（23）磯貝英夫「三島由紀夫の『潮騒』」『国文學　解釈と教材の研究』一〇巻一三号、学灯社、一九六五年、一二〇頁。

(24) 三島由紀夫「川端康成宛一九五三年三月一〇日付書簡」決定版全集三八巻、二七四頁。
(25) 注(9)に同じ、四三頁。
(26) 注(8)に同じ、一四二頁。
(27) 三島由紀夫「あとがき「潮騒」用」決定版全集二八巻、二七四頁(初出不明)。
(28) 無記名「週刊図書館」(『週刊朝日』五七巻、朝日新聞社、一九五二年)、八〇頁。
(29) 注(1)に同じ、三一九頁。
(30) 三島由紀夫「映画の中の思春期」決定版全集二八巻、三四一～三四二頁(初刊『亀とウサギに追ひつくか』村山書店、一九五六年一〇月)。

(ぱくすじょん／本学大学院博士後期課程)